

少し

河野志帆

少しは役に立つがらくた
放棄した自転車がしんと伸びている
十年と十日
メッキは剥がされて金属は錆びついて
待ち構えていた森の入り口で
旺盛な蔦に絡んでいる
周りの空気と均一になるように
薄く広がって透過して
とける準備はできているけれど
捨てたことを覚えている限りは
消えたりしないものだ
と横切って
まばたいてシャッターを切る
一日毎に繰り返す
わたしはわたしの肉体として
生きて動くことを確かめる
肉体は精神より
すこしはやくに
少し早くに発つらしい
街の中でも森の中でも
似姿を探すのが普通になって
さよならを言わず発ったあなたに
やっと会えたけれど
代わりに長い時間を過ごしていた